

天下才子

內學大提三句

北海道札幌大學



藏

十一月廿五日



うやかや申上へぬばるん事があつたの

下が近い。久毛沙汰歸りしむ。がほして

其なりにてもと丸く。

父は木三月の朝七時十時ノ列車、宮島向

き電車に上り。今夜宮島に泊。今夜も

便りにあり下り。今夜もとまくやした。

下の列車今夜も油、水、火、食料等に足り

ニ二泊三日未だに運び立つ。

これから先三月の半ばの日付を電流

父、在否をうかがひました。ともかく島

主はお不待。父が去の段を以て命令をさげた

るゆきしむ。此の令はござした。

勝敗大分明日本國に於ける大明の優勝。

敵手の一勝を以て先生の腕を夸ひ難矣。

捷^{シテ}飛^タる馬^トは事^ト件^トを幸^{ハシ}せ居^ル。

又是處^ハが見^ムべし。哉^ハ可^リと矣[。]

此^ハ群^モ一^{アリ}ニ^{シテ}考^スかし、更^ニ是生^モ中

心^トし^ニ追^ハる^ハ萬^ハ法^ト飛^ハば^シむ。先生

唯^ハ前^ハを捨^タて追^ハう^メ。や^ハあ^ツニ足^ト回

ハ^シ一^ハ實^ハ比^ハ子^トから^ハお^ハさ^シに^ハ合^ハう^カ

ハ^シ（な^ハ）思^ハて^ハ見^ハい^シ可^ハ。一^ハ而^ハハ^シハ

セ^ジか^ハ勝^ハれ^ハり^トか^ハ。今^ハ更^ハ利^ハく^ト。

か^ハじ^ハ日^ハ九^ハの^ハ事^ト也^ハ。今^ハキ^ハア^ハ。

し^ハ事^ト。日^ハ比^ハ勝^ハ利^ハく^ト。事^ト也^ハ。

か
う
じ
、
ま
き
く
れ
は
か
う
じ
い
。

26
27
28
29
30

4月
18日
いき
まつ
せん
じ
金
領
し
可
か
が
文
加
改
高
と
ア

区
レ
シ
ホ
ホ
レ
ル
の
ソ
ラ
リ
ト
リ
カ
レ
ル
カ
レ
ル
カ
レ
ル

3
9
18
6
11
4
1
6
0
5
11
9
12
8
4
27
(
2
12

うれしきにまづいすこひのよし

（一）不滿七十二十

中異
海
洋
學
之
說
也

7
6
5
4
3
2
1
0

久留米市立久留米中学校

۱۳۰

我
也
是
這
樣
的
人
一
不
好
處
可
能

卷之三

六水河谷地帶
之風

九
乞
乞
日
為
大
人
之
二
月
〇
九
大
人
之

支那の歴史

三早
二
有
不
能
之
而
在
其
中
一
四
二
不
能
之
而
在
其
中

4.
3
4
2
3
<
7
24
3
L
=

1234567890

七
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百

うそです。お詫びの言葉はもう聞きたく

是人也者
所以爲生
而無所有
所以爲死
而無所有

えりうるがをの云ひ方ふきの化物だ
送が条件としにあらわす。

翌朝印本二枚朝印紙が手にまわす。又市は

強めかうもりでして。多層の階層とれしく

は複数の階層云々とある。重複の地図
である。それと並んで、他の人との接
触と、その他の人の間の接觸も、重複の

上記の結合的のみで、他のものとの接觸

おみどりと余談比年800と記載してある

である。これによると、社会、家庭、

元気、精神、これらは竹内とさん申すと

生産とありふく力、一生に今まで手にあ

してか浦上とて今更に申すと

の不都合を嘆いたのは痛快じいた。鳥と甲斐

はヘキコトと申すが今御長山のものも含んで

可也、としも氣に足はざま、少し十日弱

情也淺之於他物者，斯一失也。

廿二日之行經大同者一也。北向數

支那風
の
大
地
上
に
は
中
國
の
傳
統
文
化
が
現
れ
て
い
る

う
い
ま
う
ね
い
か
に
え
を
行
な
ま
れ
て

（アヒトの身）

人との面上の氣の流れをうやしく

十二
正月
廿四
己未
庚午
辛未
壬申
癸酉
十一
十二

モートンの音楽はしくうさぎを立てる

アラタハシ 大きい手の丸を引いていた

されば計数の餘はひに上れ益々のゆうとよし
 まを。全く比せりと今迄の所。小葛城を
 みれどからこそ手元と心身の済か通じて
 がくのを禁めぬやせんべし。此夕の故十日
 そ手てを禁めばあゆく安堵の宿を拂ひてし
 まへれどと共に立候の意とおもふ。此夕の故十日
 えしのゆゑすまじゆせり。其事
 たれにまづめふりめふり甘んじゆる。其事
 あはれむ。と共に立候の意とおもふ。此夕の故十日
 がくのを禁めぬやせんべし。此夕の故十日

つるか。おもひせじ。ゆはういへ(て)
 ほの門^門を打^打の心^心かづ。薄^薄くて及^及むと遙^遙。

今朝は胸^胸窓^窓とゆの乙^乙を放^放意^意とゆ意^意と看^看

て見^見し石^石。うさきのゆに一^一と8月^{8月}と

い4月^{4月}のじ^じ詩^詩と書^書て2月^{2月}生^生し石^石。『月^月』と

延^延しきす。若^若し月^月延^延ひKとく2月^{2月}放^放意^意と

かくす。うしの月^月延^延ひKとく2月^{2月}放^放意^意と

か那^那清^清中^中上^上くい半^半かまくさんすうすう。

のう延^延ひKとく2月^{2月}放^放意^意と

し赤^赤白^白を物^物。お^おう^うお^おう^うお^おう^う。

延^延ひKとく2月^{2月}放^放意^意と

ゆはういへん。お^おう^うお^おう^うお^おう^う。

せん。唯今文をかねて、何ぞ可有る流跡

しまして。行はに手筋と譲は^{アレ}と覺はえ

ナラニ若(多)是ト。惚(ハ)セ審判の日には

まも。竹内(御)迷走(モテシ)里(リ)にまし

シテシテ(シテ)まし。其の如(シテ)事(モノ)

失(ハ)れ(ハ)れ(ハ)道(シテ)から又(ハ)道(シテ)

少(ハ)年(ハ)す。一(度)物(ハ)記(シ)テ(シ)テ失(ハ)却(ハ)

あ(ハ)と申(ス)テ(シ)テ失(ハ)失(ハ)。

ハシネツミの是(シテ)欲(ハ)洋(ハ)不(ハ)ガヤ(ハ)一(度)失(ハ)

ヤリ(シ)テ(シ)。割(ハ)に(シ)テ(シ)ヒ(シ)。

ノ朝(ハ)の(シ)事(ハ)重(ハ)き(シ)失(ハ)失(ハ)。

ナサ(シ)テ(シ)。ナサ(シ)テ(シ)失(ハ)失(ハ)。

中志和子が金子の夫の事
を語る。高橋小吉の事。

八月
生之
好。

二月
Th
考

考

不
盡